

(2) 意見発表

塩原 俊輔 様

第1回制度をともにそだてる懇談会

塩原俊輔

自己紹介

- 中学時代に不登校を経験
- Prima国際高等学校所属
- 現在進学へ向けて勉強中
- ユースセンターでの居場所づくりに関わる予定

当事者として感じたこと

- 当時フリースクールの存在を知らなかった
- 仮に知っていても当時の自分では動けなかった
- 体調不良で朝起きることが難しく、外へ出る気力を失っていた。
- オンラインゲームが安心できる居場所だった
- 本心では外に出たかった
- 中学に戻ることはハードルが高かった
- 何をどうすればいいかわからず不安を感じていた
- 最初の1歩のハードルが最も高い

フリースクールに必要なと感じること

- 外に出るハードルをできるだけ低くすること
- 安心できる場所であること
- 人と関わる中で自信を持てる場所であること

感じている課題

- 子どもや保護者が主体的に動くことで支援へ繋がるケースが多いこと
- フリースクールがどのような場所なのか知られていないこと

提案したいこと

- 学校から直接コネクトできる仕組みづくり
- フリースクール、県認証制度の認知向上
- フリースクールスタッフとの顔合わせや情報共有の場づくり
- 複数のフリースクールと連携できる体制づくり

目指したいこと

- 「少し行ってみようかな」と思える環境
- 学校から自然に支援へ繋がられる環境

中村 里子 様

テーマ『相互理解』

* フリースクールの事が知られていない
→ どういう場所なの？

* フリースクールへの理解が様々
→ 立ち位置はどこなの？

* 不登校の子どもや家庭への理解がまだ十分ではない
→ 何に困っているの？

* 学校側への誤解も多々ある
→ (保護者が学校から) どう思われているか、不安

* 学校側の動きづらさがある
→ 重要な役割の兼任等

それぞれの経験、価値観を元にわかる範囲（できる範囲）で対応している状況。
相互の状況を正確に把握、整理する人員が不足している。

相互理解を深めることで、
認証制度の必要性、意義が伝わり
不登校の捉え方、理解に繋がり
多様な学びの充実が進むのでは？

安部 映樹 様

信州型フリースクール認証制度

「第1回制度をともにそだてる懇談会」

フリースクール未来 代表 安部映樹

提案発表用資料

提案1【出席扱いのさらなる広がり】

現在、私たちのフリースクールでは、小中学校と連携して当施設に登校或いは自宅で文科省の出席扱いの7項目をクリアしているICT教材を使って学習した日は、出席扱いとなっております（ハイブリッド出席扱い）。長野県は現在、高校への調査書に出席日数の記載をしていませんが、学校に行かない選択をした親子の中には、通知表に出席日数が記載されることだけでも喜びを感じる方もいます。

方法としては、たぶん長野市が制作したと考えられる「通所・登校状況報告書」にて毎月メール添付の形で出席日の報告をしています。このようなスタイルが全県に広がると、安心できる親子がもっと増えると思います。

※参考・当施設の出席扱い対応校数 小学校1校・中学校8校

提案2【成績認定の教育現場への認知を高める】

2024年8月29日に文科省から出された、学校教育施行規則「不登校児童生徒が欠席中に行った学習成果に係る成績評価について」。まだまだ学校現場での認知が進んでいないと思います。わたしたちの施設でも成績認定まですすんでいる学校は数校ありますが、まだまだハードルが高いのが現状です。

後述の通り、生成認定がされなくても高校に進学できますが、やはり認定された方が「自分が認められた」という気持ちにつながると思います。

提案3【成績認定がされていなくても、高校入試によって全日制に進学できる事実の告知】

多くの親御さんは「学校に行っていないから全日制高校には進学できない」という間違っただ認識を持っています。中学校に全く行っていなかった私たちの生徒が、数年前「長野高校」昨年度「屋代高校」に入試を普通に受験して合格しました。

そういう事実の告知がすすめば、学校に行かない選択をしたことに不安になったり、悲観したりする必要はグッと少なくなると思います。

和田 周晋 様

信州型フリースクール認証制度に期待すること

学校を否定しない。けれど、学校だけを中心にしらない社会へ

一般社団法人大きな玄関 和田周晋

全国から参照されうる「信州モデル」として、学校外の多様な学びに「公的な尊厳」を。

1 基本認識

信州型フリースクール認証制度は、学校に行けない、又は行かない選択をした子どもの多様な学びの場の提供・充実のために創設された制度です。この制度に期待したいのは、施設を認証することだけではありません。学校中心社会の中で生まれる不登校へのスティグマをほどこき、学校、フリースクール、家庭、地域、仕事、文化、人との出会いなど、子どもがその子に合った形で育つ選択肢を、貴賤や上下なく、等しく尊重する社会へ進めることです。

2 現場から見える課題と、制度に期待する改善

現場から見える課題	制度に期待する改善
<ul style="list-style-type: none">● 学校中心社会が生むスティグマ 不登校の苦しさは、学校へ行かない状態だけでなく、「行けない自分は大めだ」というまなざしを背負わされることでもあります。● 居場所と学びの序列化 「居場所支援型」「学び支援型」の区別は、「居場所より学びが上」という受け止めを生みやすい。しかし、安心・回復・休息・生活・遊び・対話・人との関係性も、子どもにとって大切な多様な学びです。実際には、学び支援型の場でも居場所的な関わりが重視されており、両者を明確に切り分けることは困難です。● 経済的負担と補助金の使いにくさ 文科省調査では、フリースクールの月額会費平均は約3.3万円。国公立の義務教育は授業料不徴収である一方、学校外の選択肢は家庭負担が大きくなりやすい。運営費補助も人件費3/4以内、活動費1/2以内など割合式が中心で、持ち出し前提となり、無料・低額で開くほど使いにくい面があります。● 連携の難しさ 利用児童生徒は複数校にまたがります。情報共有・支援会議・個人情報の扱いについて、本人・保護者・学校・教育委員会・SSW・SC・行政・民間で認識に差があります。	<ol style="list-style-type: none">1. 信州モデルとしての価値を明確に 長野県内だけでなく、全国にも影響を与えうる制度として、学校外の選択肢を「例外」ではなく、正当な学び・育ちとして位置づけ、「多様な学びに上下はない」という価値を発信してほしい。2. 類型の見直し 「居場所支援型」「学び支援型」を上下なく扱い、将来的には一本化、または機能別加算へ。居場所を「学びの前段階」ではなく、生活・遊び・対話・休息・地域との関わりを含む多様な学びそのものとして位置づけてほしい。3. 補助金設計の見直し 割合式だけでなく、定額・基礎運営費・利用者負担軽減への支援などを組み合わせ、無料・低額で開いている場にも届く制度へ。家庭の経済状況で選択肢が狭まらない設計にしてほしい。4. 県による連携指針の明確化 本人・保護者の同意を前提に、学校・教育委員会・支援機関・フリースクールがどこまで、どう情報共有できるか、支援会議の標準モデルや連携推進員の役割を明確にしてほしい。

3 結び

目指したいのは、学校かフリースクールかの比較や競争ではありません。学校を否定したいのではなく、学校だけを唯一の中心にしらない社会をつくることです。学びとは教科学習だけではなく、安心して休むこと、遊ぶこと、誰かと関わること、地域の中で役割を持つこと、自分のペースで世界と出会い直すことでもあります。不登校という言葉が、子どもを否定する言葉ではなくなり、やがて必要のない言葉になっていく。そのために、この制度には、学校外の選択肢に学校と同じ尊厳を与え、当事者の自己肯定感を回復し、その子とその子らしく生きていける人生を後押しする制度であってほしいと考えます。

期待する方向性：居場所も多様な学びである。生きていることを支える制度である。家庭負担の軽減と連携指針の明確化。学校外の選択肢に、学校と同じ尊厳を。